

学生たちの観た日本

大学名： 北京科技大学

氏 名： 黄新

テーマ： 4. 日中間の交流

今回の訪問で最も重要だったのは交流であり、交流を通じてこそ理解ができるのである。そうした交流を通じて、私たちは嵐山、金閣寺、清水寺などの名所の中に伝承された文化を理解し、そして茶道、座禅などの文化が中国から日本に伝わったことを知った。従って交流とは多様化した、またどこにでも存在するものなのである。

小さな面での交流では、例えばコンビニで買い物をした時、人に道を聞いた時、店員に頼み事をした時の交流など、ちょっとした一言二言の会話だが、このような交流を通じて、一般の人々の生活態度を理解でき、両国の店員のサービスレベルや態度の面での違いを比べることができる。そうしたマイクロ面からマクロ面を総括すると、まさに店員の親切で行き届いたサービスから彼らの仕事の厳格さを感じ、彼らがこのような真剣さ、積極性、厳格さにより、世界でも一流の製品を造り出していることが分かる。

大きな面では、例えば各業種の企業の従業員や経営陣との交流だが、交流を通じて私たちは彼らの心のこもった事前準備、苦勞を惜しまない各種手配など以外にも、企業の成功の道りと歴史を目の当たりにし、彼らの先進的な経験、管理方式とハイテク技術を理解できた。百聞は一見に如かずで、例えば多摩川のゴミ清掃工場は、本当に自ら現場に足を踏み入れてはじめて、巨大なゴミの貯蔵、攪拌場を見ることができ、またその周囲は決して不快な悪臭がないことがわかる。ホームステイでの交流もそうだ。自ら宿泊し、生活し、そして交流することで、互いに相手の実際のライフスタイルと習慣を理解することができ、そして深い友情を育むことができる。同様に、大学生との交流でもその意義は英語や日本語の練習だけでなく、更にそれぞれの考え方や将来についての希望などが本当の意味で理解でき、これらはいずれもお互いに参考にできる重要な意義を持っている。

まさに参事官が言ったように、中日間には違いがあるだけでなく隔たりもある。そしてこの両者は交流を通じてのみ相互理解ができ、さらに違いについての相互理解と隔たりの埋め合わせができ、最終的に誤解を減らして共に友情を育むことができるのである。今回の訪問が中日間の交流に貢献したことは、私たちにとって光栄であり、また誇りでもある。

大学名： 北京科技大学

氏 名： 李闊

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

日本に着くと、ガイドの中島さんが私たちに、「日本人は小さいときから他人に迷惑を掛けないように教育されている」と教えてくれたが、その時点では私はあまり理解できていなかった。しかし日本人との交流が増えるに従って、私は日本人のマナーや他人に対する配慮を重視するといった点にとっても感心するようになった。

市街で道路を横断する時、運転手は横断歩道のかなり前の位置から減速し始め、そして車を横断歩道の手前で停めて、通行人が渡り終わってから引き続き走行する。この点が日本人のマナーと他人に対する配慮を示している。

それから、日本人は見知らぬ人が歩いて来た時も、自発的に頭を下げて挨拶する。外出時やレジでの精算時など、笑顔は難しいことではないが、それは人に心地よさと活力をもたらすことができる。調和のとれた社会は各人の努

力が必要である。いつの日か中国でもこのような和やかな雰囲気が形作られることを願っている。

今回の訪日で私が最も印象深かったのはホームステイ先のホストファミリーで、私が滞在した2日間で家族の間でも調和がとれていることが分かった。夫は仕事をして家族を養い、妻は専業主婦だが、夫と妻の間にはいわゆる地位の違いというものはなく、彼らは尊敬し合い、家庭の雰囲気は和やかであった。私がホームステイした家庭では2人が中国語を話せ、彼らと話している中で中国に言及した時、彼らは「貴国」と言うなど彼らの配慮を感じた。

今回の訪日で触れあった日本の人々は皆いつもマナーが良く、それによって人々の生活の調和がとれていることに、私と仲間たちは皆強い印象を持った。中国の社会も更に調和のとれた社会になるよう望んでいる。

大学名： 北京科技大学

氏 名： 馮焱

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

マナーについて言及する時、私たちは常に「中国5千年の文化と礼儀の国」と言うが、しかし今回のプロジェクトを通じて、私の心に深く刻み付けられたのは、礼儀とは文化の蓄積ではなく、国民の素養の現れであるということだ。私たちの訪日前には、大声で騒いではいけない、地下鉄内で携帯電話を使わない等々の注意が主催側からあった。その時私は「中国の大学生として、出国後に自分たちの言行に気をつけるのは当たり前だ」と不快に感じたものだった。しかし今になって、私は研修の意味は一時的なものではなく、私たちの今後の生活のためだったことを悟った。私は、私たち中国人がそのマナーで世界から賞賛されることを願っている。

案の定、空港から地下鉄まで、人の流れの多い場所でもすべて然るべき静けさが維持され、互いに礼儀正しい、というのが私の最大の印象だった。日本の人たちは一般的に他人に軽々しくお願い事をしないが、しかしいったんお願いを受けた場合は、たとえ見知らぬ人だとしても必ず可能な限り手助けをする。このような感情(社会、友人間の)にはとても敬服させられるし、また私たちが学ぶべきものだ。別れる時には両手を振って見送り、会った時はお辞儀をする、これらはすべて私たちも身につけるべき習慣である。「細部が勝敗を決定する」と言うが、おそらくこれらの日常の小さな事柄が日本というこの神秘的な国の成功をもたらしたのかも知れない。

おそらく12日間の生活では日本人がどれほど他人へ気配りするのかを完全には体験できないのかも知れないが、ホストファミリーについてだけ言えば、他人への気配りという点を私はとても強く感じた。私が散歩に出かけて帰って来るたびに、ご主人は私に先ず入浴するかどうかを尋ねたが、こんな生活の中の平凡で小さな事にも、私はとても感動した。

私の個人的な観点かも知れないが、これらは私が実際に感じた日本で、日本人のマナーや他人への配慮は本当に私たちが学ぶべきで、それは自分だけではなく、社会も前進させることにつながると思う。

大学名： 北京科技大学

氏 名： 武文兮

テーマ： 1. 国民性についての理解

国民性とは何か。『百度百科』では、「国民が共有し、繰り返し現れる精神的特質・性格の特徴、内面的感情、価値観、思考方式と行動方式などの総和であり、一種の比較的安定した心理や行為の構造である」と説明している。ちょっと見ただけでも、このテーマはとても大きく、その含む範囲はとても広く、社会生活の各方面に関わるのだが、この12日

間の日本での見学を経て、そのうちいくつかの細部からその国民性の現れを観察でき、わずかだが目的に達した。

1. 最も一般的な現象として、歩行者が道路を渡る時は、東京でも、京都でも、小田原市でもすべての人々がいずれも赤信号では停まり、青信号では歩くという規則を厳格に守り、路上に車が見えないからと言って赤信号でも渡るという現象は全くない。
2. 地下鉄の乗車と下車では、すべての乗客は皆一致して「先ず下車、その後乗車」の規則を守り、誰かが誘導する必要はなく秩序が維持され、地下鉄の運行時は話をする人はなく、とても静かだ。
3. 日本の家庭では小さいときから子供に自分の事を自分でするように、できるだけ他人に迷惑をかけないよう教育され、自律、自治、自己管理を身に付ける。
4. 日本の街路は清潔で紙屑はなく、一部の家の入り口には鮮やかな草花が植えられ、街路にちょっとした活力を与えている。

これらの点が私が感じる日本と中国の違いである。おそらくこれらの小さなディテールが正に日本人の文化的特性と性格的特徴を形成し、彼らを先進国の一員としたのかも知れない。これらは私たちが少しずつ学ばなければならないものであり、おそらくかなり長い期間が必要だろうが、私は中国という古い歴史を持つ国が必ず新たな活力を生み出すだろうと確信している。

大学名： 北京科技大学

氏 名： 梁璟暉

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

日本に来る前に、すでに日本人はとても礼儀正しいとは聞いていたが、彼らのマナーへの重視がこれ程までとは思ってもよらなかった。

商店でもレストランでも、また地下鉄の車内でも、私の行った所のどこでも、日本人が大声で騒いでいるのを耳にしたことはなかった。彼らは非常に他人の気持ちを重視し、自分が周囲の人々の邪魔をすることを望まず、従っていつでも小さな声で話し、しかも物腰は柔らかい。どんな地位の人でも皆紳士淑女を感じさせる。最も代表的なのはサービス業の従業員たちで、いつも笑顔でお客を迎え、とても自然な親切さを感じた。

ディズニーランドで私は無作為に、何人かの外国の観光客に彼らの日本に対する印象を尋ねると、とりわけ多い反応は「People here are really polite and friendly. (この人々は本当に礼儀正しく親切である)」だった。私は観光客で触れ合う人が限られているためにそう言っているのだろうと思っていたが、何人かの日本で数年暮らしている外国人もみな日本人のマナーと素養はとても素晴らしいと言うのを聞いて、彼らの態度は国民的な現象であることがわかった。

この12日間で、最も多く耳にした言葉は「すみません」と「ありがとう」だった。日本人は常にこの言葉を使うが、お客あるいは友人に対して言うだけでなく、とても近い関係の人に対しても同じだ。私は心からの他人への尊重、お詫びあるいは感謝といったものはすでにこの民族の習慣になっていると感じた。マナーは彼らにとっては愛想ということではなく、一種の生活態度、つまり真剣な生活態度なのだ。彼らは傲慢でも卑屈でもなく、礼儀正しく、世界各国からの来客に一種のしっとりとした玉の輝きを示す。日本で最も美しいもの、それは正にこれらの友好的な日本人なのだ。

大学名： 北京科技大学

氏 名： 李慧

テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ

3. マナーのよさと思いやり

日本訪問の12日間で、私たち一行は日本の各種企業、一般家庭そして観光スポットで様々な交流を行った。そのうち最も印象深かったのは企業従業員の集団意識と日本の民衆の接待ぶりと礼儀正しさだった。

トヨタ自動車の生産ラインを見学した時、同社の工場では各種部品が秩序正しく整然と並べられ、巨大な生産ラインでは、各従業員は自分の作業を決められた時間内で完成させている。トヨタが一貫して実践する「ジャスト・イン・タイム」の理念も終始徹底され、部品などの資源の浪費をもたらさず、そして生産ラインの周囲には「アンドン」と呼ばれる生産状態報告システムが設置されている。いかなる生産過程でも問題を発見すると、アンドンを作動させその場で直ちに解決し、生産ライン全体を止めてでも問題が次の生産段階に入るのを阻止する。すべての従業員が自由時間の中では親交があり、上下関係の制約はなく、一つの大家族の中の一員同然なのだ。その他に、オムロンや三井物産などの企業でも私たちは従業員間の家族的な和やかさと打ち解けた雰囲気を感じることができた。

そしてホームステイの2日間で、皆はいずれも一般家庭の親切なもてなしを受けた。私個人について言えば、私が滞在した家庭には2人の小さい女の子がいた。しかも夫妻は二人とも中国の大学に留学した経歴があるため、皆中国語が話せ、私はとても安心した。交流においては、彼らは私が和食に馴染めるか、遊びに行きたい場所はあるかなどを常に気遣ってくれた。私の好みに合わせるため、特に料理では食べ物を温めたり炒めたりしてくれた。朝晩は皆あいさつし、終始微笑みを絶やさず接してくれ、また親切な2人の女の子は、中国語はしゃべれなくても私と一緒にゲームをしたり、一緒に太平洋の海辺で綺麗な貝殻を拾ったりして遊んだ。彼女たちはまた一瓶の綺麗な貝殻をプレゼントしてくれた。一緒にいる時も非常に礼儀正しく、利口で可愛く、食事の時は自分で食器を並べたりできて自立心もかなり強かった。

この12日間で日本について一定の理解が得られたと思う。良好な社会の雰囲気は印象深く、ソフトパワーの面で私たちは学ぶ余地がある。今後、中日両国がより友好的になるよう願っている。

大学名： 北京交通大学

氏 名： 董耀聰

テーマ： 1. 国民性についての理解

日本と中国は文化の上ではとても深い根源を持つが、実際にはそれほど多くの共通点はない。それは日本が島国で、島国の持つ特徴が閉鎖性だからだと私は考える。中国では隣近所の人々の間の付き合いは非常に打ち解け、皆でよく一緒に食事したり、世間話をしたり、祝日を祝ったりしているが、日本人は皆一定のプライバシーを持ち、彼らは皆自分のプライバシーが必要と考え、最も親密な人でもお互いに自分のプライバシーを尊重しなければならないとしている。しかし中国では、多くの親友や両親と子供の間にはいずれもプライバシーは存在しない。この点から見れば、中国はより開放的で、日本はある面ではより閉鎖的だ。

それからいくつかの文化的に遺留されて来た害毒という点から国民性について語れば、中国人には昔から強烈な民族的欠点があり、いくつかのものは骨にまで浸み込んでいる。しかも現在の中国は経済発展と社会の全体的建設をより重視しているため、文化的な発展面では確かにいくつかの軽視があり、しかも市場経済の急速な発展は富の不均衡という現象をもたらしている。日本では、日本政府が毎年社会保障に投入している予算は35%近く、これも日本と中国の国民の経済的実力にやはり差がある事を物語っている。したがって多くの面で、現在の中国は先ず利益の問題をより考慮するが、日本人はこの問題を先に考慮することはあり得ない。よって両国は文化の発展という問題への対応でも、上から下まで、政府から庶民まで、採る政策と態度が異なるのである。これはまた、何人かの学友が日本を訪れた後に中国の文化保護などの行動について、ひどく心を痛めていることにも現れている。しかし両国の根本的な違

いがあるため、私は決して比較できるものだと考えていない。

従って両国の国民性にはやはり非常に大きな違いがあるのだが、しかし私にこれについては遠からず質的な飛躍があるものと確信している。

大学名： 北京交通大学

氏 名： 陸沢臻

テーマ： 1. 国民性についての理解

12日間の見学と訪問の中で、私は日本民族とその国民性について新たな認識を持った。

厳格さ。日本人は厳格な民族であることを認めないわけにはいかない。時間の遵守と製造した製品についての品質要件の中に永遠にこの点を見ることができる。わが国の社会と比べて、日本社会では多くの「いい加減」さが許されない。

細部への重視。日本人の生活や仕事における細部への重視は驚嘆に値する。街中の小さな居酒屋であれ、また三井物産のようなビジネスの巨頭であれ、また個人の日常生活であれ、経営、仕事、生活の中における日本人の細部に対する重視は随所に見られる。農業栽培の科学研究について言えば、日本人は至る所で異なる環境と栽培方式が農作物にもたらす影響の研究に留意し、すべての細部を技術推進の出発点に転化する。

自己規制。日本人は幼少から自己規制の教育を受けている。しかもこのような規制は日本人の社会の中で至る所に見られ、これも自殺率の高さの一つの重要な原因になっている。

大学名： 北京交通大学

氏 名： 徐哲宇

テーマ： 1. 国民性についての理解

2. 集団帰属意識の強さ

5. アニメなどのソフトパワー

この3つのテーマを選んだことには理由がある。私は幼いころから家庭内の政治的な影響を受け、国民全体のイデオロギーについて非常に興味を持ち、同時にこの問題を探求したいと考えているため、先ず日本の国民性について一定の理解を持ち、また日本人の思考を深くシミュレーションして、ソフトパワーの問題を見たいと考える。したがってこの3つを選んだ。

今回の訪問を通じて、私は日本の全体的な国民のイデオロギーは完備され豊富だが、モノクロのようで、面白みに欠けたと思った。その原因は3つあると考えるが、個々に説明する。

1. アニメ・漫画のソフトパワーがやたらと発展しているが、実は私はビジネスによる文化に対する侵略だと考えている。現在、世界で日本の漫画の販売量はナンバーワンで、主にわが国の青少年に向けられ、そのうち多くが日本の伝統的な情報の紹介であり、また一部の作家は知らず知らずのうちにそれらに感化されている。私はこれが日本文化の対外発展における重要な手段だと考える。
2. 日本の国民的な素養はとても高い。その国民性は政治を基礎とし、生活の中では公平で譲り合い、マナーは非常に行き届いている。これは伝統によるものと考えられる事ができるが、その国民性を保証しているのは公民の信頼であり、信頼の前提としては「小康生活(ゆとりのある生活)」が考えられる。これらを前提とすると、もしどこかの部

分で矛盾が発生した場合、それらが揺らぐおそれがある。

3. 日本の全体的なイデオロギーの形成は1970年代以後、次第に経済が発展した後に今日の状態に形成されたものだと考える。それはトヨタ、東芝未来科学館の中でも何度も言及され、しかも三井物産に見られるような発展形式は日本の多くの形態の一つであり、従ってイデオロギーの全体性が国民的意識のカギである。

以上の三点に基づき私の結論を導き出したのだが、もし誤りや不足があれば先生方や学友のご批判やご叱正をいただきたい。

大学名： 北京交通大学

氏 名： 趙栖沢

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

日本で私がとても印象深かったのがマナーだ。5月25日に全日空便に乗って関西国際空港に向かってからの、日本の客室乗務員の一举一動は私に深い印象を残した。ワゴンを押して通る際には、ひっきりなしに「すみません」と声をかけるのだが、それは一方では通る時に乗客の身体が道を遮っているため、もう一方ではワゴンが通る時に乗客に面倒を掛けるため、済まないという気持ちを表している。その後の日本での12日間で、私たちと触れ合った日本の人々は皆友好的に接してくれた。別れの際は手が疲れるほど手を振り、ホームステイ先の奥さんのユウコさんも、外出時常に私に休憩しなくて良いか、喉が渴いていないかなど尋ねてくれ、日本人はとても他人の気持ちを察していると思った。中島さんの紹介によると、日本人は幼い時に、自分の手の届く範囲内の事は自分の事であり、他人に頼らず自分ですべてやり遂げるよう教育されるのだという。

まさに他人の気持ちを重視するために、通行する時は左側を歩き、自分で出したゴミは自分で家に持ち帰り、食事の後は片付けてから立ち去る等々、多くのディテールが体现されている。これらを中国と比較すると、本当に何をどう言っても良いのか分からない。そしてこれらすべてが幼い頃からの教育の産物であり、同時にまた生存環境がもたらしたものでもある。私のホームステイ先には2歳の女の子がいたが、ケイさんとユウコさんの彼女への教育からもそれが見て取れた。ミオは食事もすべて自分で食べ、もし食べなければお腹を空かせたままである。そして幼い時から自分の事は自分でする。そして環境面では、周囲の人々が皆同じ事をしている時には、自分も自然と同じ事をするようになる。例えばJRの電車に乗る時、皆が静かにしていれば、自分も大声で騒ぐことはない。

以前から日本の人々はとても礼儀正しいと聞いていたが、国民全体の範囲で、しかもこれ程までだとは日本に来る以前には予想もできなかった。

大学名： 北京交通大学

氏 名： 趙汝豪

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

4. 日中間の交流

1. マナーのよさと思いやり

日本人は非常にマナーを重視し、お辞儀をしてお礼を言うのは不可欠で、しかもこれらは日本人の脳裏に深く刻まれているが、日本人はまた外国人のこれらマナーに対してはとても寛容である。日本の多くのマナーは日本人自身にとっても煩雑かもしれないが、彼らはそれをしっかりと守っており、外国人の日本のマナーにそぐわない部分に対して

は十分に尊重し固執しない。これには私はとても好感を持った。

2. 日中間の交流

私から見て、中日間の交流はとても順調というわけではない。この数年中日関係の緩和により、多くの日本人あるいは中国人が相手の土地に足を踏み入れ、その風土と人情を体験しているが、大部分の国民にはこのような触れ合いの機会はない。日本の大学生にとって中国はあまりなじみがなく、その理由は一方では中国には日本で幅広く発信されるような文化的商品がなく、若者の注意を引くことができないからで、もう一方ではメディア上であまり真実の中国が伝えられていないからである。そして中国の若者は多くが書籍やアニメ・漫画から日本の情報を得ているが、一般の日本人についてはあまり理解していない。両国間の長期にわたる発展のために、青年交流の強化は必然的な流れだと思う。

大学名： 北京交通大学

氏 名： 楊曉宇

テーマ： 4. 日中間の交流

12日間の訪問日程が間もなく終了するが、この12日間で私たちは多くの日本企業の従業員、大学生、それから日本の家庭と友好的な交流を行い、中日間の交流に関して私は次の2つの実感を得た。

第一には中日間では人々が友好的で深い交流を行うことができることで、私は学生からホストファミリーのお父さんやお母さんに至るまで、皆興味のある話題について交流ができ、しかも私たちが互いに相手と友達になりたいと思っており、それは両国の大部分の人々が非常に友好を願っていることを物語っている。

第二の実感は中日両国の民間交流を妨げているのはお互いへの理解不足であり、いくつかの誤った情報あるいは不適切な比較が、私たちと日本の人々に思い違いをさせていることである。例えば日本の子供は中国にはマクドナルドがないと思っていたり、またあるいは私たちが日本に来る前には日本人は比較的冷淡だと思っていたりしたことで、事実は私たちが考えていたのとは違っている。私は中日間の交流は、お互いの理解促進に重きを置いた上で行うべきだと思う。双方にはいずれも交流の願望があり、理解を深め、誤解を取り除きさえすれば、必ずやより良い交流の成果が得られるはずである。

先生の、「私たちが見たのは日本の全てではないため、私たちは全身の触角を立てて、理解し、吸収そして交流しなければならない」という一言には特に感銘を受けた。

大学名： 中国石油大学

氏 名： 朱悦

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

日本に着いた初日に、私は日本人の礼儀正しさに驚かされた。空港を出て私たちは自分で荷物を持って大型バスに乗ろうとすると、荷物はきちんと並べておくだけで後は運転手さんが私たちの荷物を積み込んでくれると知らされ、正直言って非常に驚いた。なぜなら中国では、自発的に荷物の積み込みを手伝ってくれる運転手に出会うことはほとんどなく、タクシーでさえ基本的には自分で荷物を積み込まなければならない。あるいはこれは日本では見慣れた光景で、運転手さんはこれを自分の仕事と見なしているだけなのかも知れないが、それでも私はやはり日本人々

の他人への思いやりの深さを感じた。しかも私たちが毎朝乗車する時、運転手さんは必ず私たちに挨拶し、毎日運転手さんの笑顔を見ると、その日一日中気分が良くなる思いがした。私たちの運転手さんだけがそうなのではなく、私たちが企業見学で出会った従業員たちも皆そうだった。私たちが企業見学に訪れた際、彼らは私たちを丁寧に迎え、また自分の持ち場で働いている従業員たちも、私たちが通り過ぎる時には皆仕事の手を休めて立ち上がり、私たちに歓迎の気持ちを示すのである。少し大げさに言えば、その時の気持ちは本当に「身に余るもてなしに驚き喜ぶ」と形容して良いものであった。そして私たちが出発する時には、彼らは車の後ろに立ち、私たちが見えなくなるまで手を振って見送ってくれた。

交流した訪問企業の従業員たちだけでなく、私たちが毎日出会う人々も皆そうだった。コンビニの店員はたとえ閉店時間になってもお客さんが退店するのを待つ。デパートの従業員たちは会話に不便が生じた時には、すぐに英語ができる人を探して私たちと意思疎通し、全く焦ったりしない。また駅にいる人々は常に整然と秩序を保ち、列に割り込んだりしない。そして人の多い車両でも静かである。こうした些細な点にも私は日本の人々のマナーと気配りを感じた。一体何が人々の素養をかくも高いレベルに統一したのか、これこそ私たちが考えるべき問題だと思う。

大学名：中国石油大学

氏 名：王浩

テーマ：1. 国民性についての理解

2. 集団帰属意識の強さ

日本に来る前に、私はいくつかの日本に対する先入観に捉われた認識があった。それは余りにも多く日本人の素養を称賛する話を耳にしていたからで、自分の中での印象は日本人がとても礼儀正しく、とても自然環境を大切にし、またとても他人のために配慮をするというものだった。

それらは日本に来た後にすべて実証され、日本人はやはり伝え聞いたのと同じだったが、私は今回日本人と全面的な触れ合いができたとは言い切れない。なぜなら私たちが出会ったのはそのほとんどがサービス業の人々であり、しかもホームステイもわずかに一家庭と触れ合えたに過ぎず、自分の見方がどれほど客観的かは言い難い。しかし私から見て日本人のこのような礼儀正しさは少々過剰で、どこでも見られる同じような礼儀正しさは、まるで訓練されたかのようなものである。私は彼らが幼い時からパターン化された教育を受けているのだと感じた。これは中国人が挨拶に「ニーハオ」と言うようなもので、とてもぎこちなく感じる。本来気ままにおしゃべりすればとても親しみを感じるのである。多くの人々は、日本人は表面上は穏やかだが実は冷淡だと考えている。彼らの穏やかさは政府が大量の財政支出を使った社会保障維持の基礎の上に成立しており、いったん国の経済に問題が生じると、社会保障チェーンが崩壊し、おそらくとても深刻な社会問題が発生するだろう。そして彼らの集団に対する認識は中国人と異なり、私たちの集団は各人の個性、各人の優位性を発揮するが、彼らは各人が皆同じであることを強制し、そうでなければ集団から駆逐されるが、これについてはとても理解し難く、私は中国のように多くのものを包容する集団の方がより好きだ。

戦争に関しては、私は両国の人々は誰もその発生を望んでいないと感じるし、しかも発生することはあってはならない。少なくとも私が見た日本の民間では、中国人に対してはとても友好的なので、私は両国の人々が共に両国友好のために努力するようお願いしている。

大学名：中国石油大学

氏 名：黄兆鑫

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

マナーはその国の国民の素養の現れである。周知のように日本はマナーを非常に重んじる国で、今回の訪日の旅で私は視野の広がる思いがした。

マナーは公共の場で体现される。日本に着いたばかりの入国審査でも、またホテルのロビー、レストラン、街中でも、大きな空間が非常に静かなのである。それはまるで他人のひそひそ話の内容まではっきり聞こえるほどだ。公共の場は皆のものであり、誰も他人の静寂を破る権利はなく、公共空間で小さな声で話をするのは他人に対する最も基本的な尊重である。決まりがなければ何事も上手く行かず、社会は強力な制度の管理監督の下でこそ、秩序立った正しい発展を維持できる。どんなに混み合った階段でも皆左側を歩き、どんなに人の流れが多くても皆規則正しく列に並ぶ。誰もが一時的な利害にこだわらなければ社会全体が便利になるが、こうした便利さは経済で維持するものではなく、幼い時からのしつけを通じて、思想や文化に深く浸透している。これは良い習慣であり、身につける方法はとても明白で、教えられる側が根気よく続けるかどうかである。

マナーは些細な部分に現れる。もし公共の場のマナーをマクロなものとするれば、些細な行為のマナーはすなわちミクロ的なものだ。日本料理が有名な理由は味が素晴らしいだけではなく、更に味わう時の視覚的な要素にある。入念な盛り付け、バランスの取れた組み合わせがすべて制作者の考えを体现しており、これは賓客に対する一種の食卓の礼儀だといえる。手を振って別れの挨拶をする、お辞儀をして謝意を表す、すべてが自然なマナーであり、相手が見えなくなるまで手を振り、相手より更に低くお辞儀をするのは、いずれも主人の客人に対する一種の心の底からの尊敬を体现している。マナーはありふれたものだが、極致までの微細さというのは容易ではない。

毎回の企業見学後、従業員が必ず親切に貴重品を忘れないよう注意してくれる。道路を渡る時はいつも、走ってきた自動車が事前に減速し、通行人の安全な横断を確認した後再度走行する。会計時はいつも、店員は目の前で紙幣を数え、少なくとも2度確認する。このように様々な形で体现された日本人の他人への配慮は尊敬に値するものだ。

大学名：中国石油大学

氏 名：丁柏昕

テーマ： 1. 国民性についての理解

私は他人の観点から離れて、自身で考えた日本の国民性に対する個人的観点について少し語りたいと思う。

まだこの日本の土地に足を踏み入れる以前に、私はすでに書籍を通じて日本人の謙虚さと忍耐強さを知っていたが、日本に来て数日が経ち、あらためて日本人の素養の高さに驚かされた。

日本の街頭ではゴミ箱をあまり見かけないが、街路は至る所清潔で、人々が出会うと互いに挨拶をする。そして規則や紀律を重んじる。また自分の事は自分で行い、他人に迷惑を掛けない等々、すべてが国民の素養の高さを示している。もし米国が全世界の優秀な人々を集めた国だと言うなら、日本は天才を育てることで世界の上位に立っている国であり、科学や教育による国興しの面で私たちが学ぶ価値がある。

私が語りたいと思う二つめの国民性は緻密で深いということだ。わが国の国民性は豊かだが、日本は緻密で深い。私はこれが地理的に決定付けられたものだと思う。日本は資源が比較的乏しいために、日本民族は一定の資源に絞って開発することしかできない。そのため彼らはリサイクルを重視し、そしてハイテク製品を作り出すことでしか生存できないのと思う。よってすべての日本から来た伝統文化も皆、茶道、禅道、華道等々の「道」になり、そして日本人の緻密さと深さはまた日本の電子機器を世界一にし、世界の精密電子製品の舞台を育て上げたのである。

今は総括するには時間がまったく足りないが、私はこれから先総括を蓄積し、自分を変えることで祖国と世界を変えたいと思う。

大学名：中国石油大学

氏 名：劉珈源

テーマ： 1. 国民性についての理解

日本の国民性について、私は以下の理解をしている。

1. 日本の国民はとても強い職業精神を持ち、彼らは皆が自分の仕事に対して極めて真剣である。それはそれぞれのディテールから見る事ができる。先ず彼らは仕事時、すべての人に対して微笑みを絶やさない、しかもそれは心からの微笑みで、皆が仕事に対してとても情熱に満ち溢れている。しかも日本人は自分が仕事を持っていること、自分が納税できることに心から誇りを持っている。そのため彼らは仕事を持った場合、極めて真剣に仕事と向き合う。これはオムロン京都太陽株式会社でも見られたことだ。
2. 日本人はとても高い環境保護意識を持っている。これは日本の路地ではゴミをめったに見掛けず、しかも街のすべての人がゴミを捨てる時は、すべて分類して捨てることにも見受けられる。この点で私が非常に驚いたのはホームステイ先で、日本の一般家庭のゴミは分類されて置かれ、しかも花や樹木を大切にしている。こうした些細なことからも日本人が非常に高い環境保護意識を持っていることが見受けられる。
3. 日本人はとても礼儀正しく、それは飛行機を下りた瞬間から見受けられた。空港から出て来た時も全く騒音は無く、至る所がすべてとても静かであった。それ以外に、彼らが他の人と挨拶する時の態度と作法からは彼らがとても礼儀正しいことが分かった。彼らはしばしば相手に向って頷きながら挨拶し、しかもフレンドリーで表情には微笑みがあるなど、こうした小さな部分から日本人の礼儀を垣間見ることができた。

以上のように、この数日の交流訪問を経て、私は日本国民にはとても強い職業意識、環境保護意識と礼儀があると思う。これらは私の私見だが、まだ体験できていない多くの事があり、将来再び体験する機会があるよう願っている。

大学名：中国石油大学

氏 名：張亜茹

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

5. アニメなどのソフトパワー

私たちが常に耳にした言葉のように、私たちが見て、知って、そして感じたものは、すべて真実の日本ではあるが、それが日本のすべてではない。この12日間で、私は私の意識の中にあつたのとは違う日本を見た。第二次世界大戦からはすでに70年近くが過ぎており、すべての日本人が軍国主義者であるわけではなく、日本の庶民も被害者であったのである。平和と発展をテーマとする今日、私たちは友好的な態度で平和を愛する人々を見なければならない。再び偏見と極端な目で日本を見てはならないのである。

日本は礼儀を重んじ、他人を尊重する国だということを早くから聞いていたが、「百聞は一見にしかず」だ。生活レベルはともかくとして、日本人には人や物事に接する態度の面で本当に私たちが学ぶべきところがある。どんな時でも、彼らは常につつましく礼儀正しい姿で私たちの目の前に現れ、互いに挨拶することは言うまでもなく、私たちが立ち去る時は、彼らは私たちが見えなくなるまで手を振り親切に見送ってくれる。最も印象深かったのはホームステイの時、私のホストファミリーは私が行きたがっていたドラえもん館(藤子・F・不二雄ミュージアム)の場所が分からなかったが、私を楽しませるために、彼らはインターネットなどのあらゆる方法で調べてくれた。しかし残念ながら週末だったために私たちはチケット予約ができなかったが、彼らのこのような態度に心からの思いやりを感じた。

もう一つの面では、日本は中国から多くの伝統文化を学んで来たが、こうした文化は現在まで日本で伝承され、そ

して世界に名を轟かせている。しかし中国では伝統文化は私たちからますます遠くなり、更にはその影さえ見つからない。私たちは伝統文化の発揚ということを一貫して強調しているが、伝統文化をいかに継承し発展させるかという点で日本に学ぶ意義は大きい。

大学名：北京語言大学

氏 名：劉華南

テーマ： 1. 国民性についての理解
3. マナーのよさと思いやり

私は日本人の国民性は以下の数点にまとめることができると思う。

- ① 他人の考えを重視し、周囲の人の気持ちを気に掛ける。この点は日本での随所に体现され、例えば路上にゴミを捨てない、公共の場所での声の大きさに注意する、他人に手間を掛けることを好まない等々だ。
- ② 距離感。常に他人と接近し過ぎることを好まず、自分で安全と考える距離を維持したが。特に親密な人であっても、自分の世界をすべてさらけ出すことはあり得ず、近寄ったり離れたり、表面的には親切だが内心は多少冷たいという感じがする。
- ③ 集団意識。自分を集団の中に帰属させることを好み、外来者を排斥する。集団の榮譽を重視し、そしてそれを個人の榮譽の上に置く、これは多くの中国人にはできないことだ。

日本のマナーとサービス面には確かに感服させられる。店員のサービス態度は確かに顧客を神様のように扱う。常に微笑み、かつ一種の敬意を込めた態度で顧客にサービスする。中国ではおそらくこのような「顧客本位」のサービスを目の当たりにすることはほとんどないであろう。

以上が今回の日本訪問の主な感想である。

大学名：北京語言大学

氏 名：賈居旦・尼加提

テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ

私はオムロン京都太陽工場の見学から、「集団意識と個人価値の実現」をテーマに簡単な感想を書こうと思う。

1. 集団意識と個人の価値の実現

1) 整理、整頓、整然

これは実地見学の前にオムロン太陽工場の説明の中で紹介された「3つの“整”」の原則だ。更に詳しく実際に見学した時に私たちが見たものは、説明で聞いたものと全く同じで、工場自らが紹介の中で自らの行動を誇張して説明していたわけではない。第一に工場の運営がこのような「3つの“整”」の原則に従っている気力に感動した。第二に工場ではビデオでの説明通りに完全かつ厳格に実施されていることに敬服した。

特に工場のロッカー上には確かに三角形の紙が立てられ、その目的は皆が使う物品は直ちに整理し、元の場所に戻すよう注意を促すためである。

2) 個人の価値の実現

周知のように、一つの工場の大部分が障がい者の従業員で運営されていながらも、依然として高品質の製品を生産しており、尚且つ工場が守るべき規則と理念を有している。これだけで十分にこの企業、この工場で働く

人々が心から誇りに感じ、より自分の仕事に努力することができるのである。

個人的には、障がい者は完全に国の資金援助を得て、自分の半生を過ごすこともできる。しかし感動的なのは彼らが仕事の中で努力し奮闘する姿で、私たち健常者からすればとても学ぶべき、そして敬服すべきことである。

2. 中国と日本の青少年及び若者のスポーツ参加の比率から見たギャップ

日本に来ると、郊外の路上や野球場でも、至る所で学生あるいは大人がスポーツやトレーニングをしているのを目にし、東京ではビルの間でも頻繁にスポーツをしている人々を目にする。

中国では逆に、公園でスポーツやトレーニングをしている老人の比率が高い。しかし若者は仕事のプレッシャーあるいは客観的に存在する大気汚染問題のために、長期のスポーツやトレーニングをしている人はとても少ない。

スポーツと言えばオリンピックで、オリンピックの精神は「より高く、より速く、より強く」だが、個人にとっては日頃のスポーツやトレーニングそして気力の育成ということだけではなく、ひいては社会、そして一国の青年の身体と精神状態を反映したものである。

もしある国の若者が毎日インターネットばかり見ていて、気分が落ち込んでいては、社会の活気はすでに大半失っていると言って良く、スポーツは社会の活力を増す一つの手段なのだ。

中国と日本の若者のこのようなスポーツやトレーニングの面での差も、私にとって比較的印象深い点であった。

大学名：北京語言大学

氏 名：孫萌

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

日本に来てから私が最も驚いたのは、日本人の他人に対する配慮だ。日本人は他人の気持ちを非常に気に掛けるが、これが彼らを自律的にしているだけでなく、思考もより細やかにしている。私は日本でこれまで気にかけて事のない多くの問題を発見した。例えばオムロン工場の障がい者の火災避難用の滑り台、そして芦ノ湖の海賊船の弱者層用のエレベーター、また東京タワーの展望台にある点字の説明板などである。これらは一見するといずれも些細な事のようにだが、これは日本人の性格、すなわち他人に対する尊重を非常に大きく体現している。

私は日本の街を歩くのがとても好きだ、それは日本の店員は絶対に、買うか買わないか、またはどれだけ買うかで接客態度を変えることが無いからだ。私が日本語が解からなくても、彼女たちはいらいらした様子を見せない。もし誰かが日本人の礼儀正しさと謙虚さが偽りだと言うなら、それはその人が日本のサービスを体験したことがないからに違いない。店員たちは皆心を込めて働いており、顧客の気持ちを考えているのである。

私は今の中国には正にこのような精神が欠けていると思う。中国の「笑顔のサービス」には全く失望させられる。私たちはこの点で日本に学ばなければならず、心から他人を思いやり、他人の世話をし、他人をもてなさなければならぬ。こうしてこそ平等が実現され、皆が真心と誠実さをもって互いに接し、本物の調和の取れた社会を作ることができるのだ。

大学名：北京語言大学

氏 名：熊夢明

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

日本人は常に他人に面倒を掛けない事を行動の規範としているため、彼らはいつも礼儀正しく互いに譲り合うが、日本人は常に敢えて他人と一定の距離を置くということも聞いたことがある。日本に来てからの12日間で私たちは多くの日本人と触れ合い、私たち自身の視点から日本人の生活を体感した。まさに先生がおっしゃるように、私たちが触れたのは真実の日本ではあるが、日本の全体像ではない。しかし私たちは例えそれらが全てではないとしても、可能な限り日本の家庭、日本の人々を体感しようとした。

日本の人々は常に勤勉で、仕事に対する情熱に満ち溢れている。企業見学時には、従業員たちは皆非常に親切で気配りが行き届いている。私たちの見学を担当する従業員たちだけでなく、一般の従業員たちも通り過ぎる時にはとても礼儀正しく、受付の従業員たちも皆親切でとても礼儀正しい。

電車や地下鉄では大部分の人は話をせず、ましてや携帯電話を使って話している人は見かけず、私は本当に驚いた。エレベーターでもとても礼儀正しく譲り合う。

ホストファミリーと一緒に生活した2日間で、私は日本人は皆とても冷淡だという印象を改めた。来日前にホストファミリーのお姉さんが私とメールでスケジュールを確認してくれ、実際に来た後も私に様々な気遣いや配慮をしてくれて本当に感謝している。

大学名：北京語言大学

氏 名：劉夢瑤

テーマ：2. 集団帰属意識の強さ

3. マナーのよさと思いやり

「走近日企・感受日本」の12日間の訪日は私に多くの新たな体験と深い感銘をもたらした。そのうち、私は日本国民の「集団帰属意識の強さ」及び「マナーのよさと思いやり」について自らの見解を述べたいと思う。

先ず、今回の訪日活動では多くの有名なリーディングカンパニーを見学したが、日本企業の本質とはすなわち日本国民の「集団帰属意識の強さ」の最良の現われだと思った。皆が訪日中にしばしば言及した内容の中の 하나가、日本人の仕事探しは他の国々とは違い、彼らの仕事探しは家探しに似ているということだ。私はまさに日本企業のこのような団結力と日本人の集団への帰属意識という要素が、日本にこれほど多くの世界的先進企業が現れた原因でもあると思う。また企業は従業員に帰属意識をもたらし、従業員を満足させてこそ、本当の意味で企業の進歩と発展を成し遂げることができるのだと思う。

その他には、中国は古来より「礼儀の国」と言うが、実はこの点を非常に良く実現しているのは日本だ。笑顔での挨拶からお辞儀といった礼儀作法まで、日本人は非常に良く身に付いている。しかも生活の各方面にまで浸透している。日本人は幼少の頃から他人に迷惑を掛けないように教育されている。例えば自分の手の届く範囲の事は自分で管理し、可能な限り他人に不必要な面倒を掛けない。この点から、日本人が生活の各方面で他人に十分配慮する習慣が見て取れる。

総じて言えば、12日間の訪日では毎日が自分に多くの新しい体験と感銘をもたらした。これらの感銘が蓄積することで自分の日本に対する認識が次第に豊富になり、それはもう地図上の座標や他人の見方といったものではなく、自分のリアルな感触が積み重なった日本になっていった。

大学名：北京語言大学

氏 名：杜岩

テーマ： 4. 日中間の交流

中日両国は隣国ではあるが、いくつかの客観的原因から現在の両国民間の相互理解が不足し、双方の印象については政治的宣伝ツール、ドラマ、インターネットから偏見を含んだ内容だけを頼りにしているために、両国民の互いに対する理解にはいずれも多少の偏向がある。12日間の日本の人々との交流を通じて、私は中日の人々の相互認識という側面について私個人の感想を述べたいと思う。

まず日本の人々の現在の中国についての印象だが、往々にして時代の変化に対応していない。例えば一部の人の話の中では、中国に対する印象は明らかに少なくとも20年前で止まっていて、中国人は電車に乗ったことがなく、自動販売機を使ったことがなく、都市建設はひどく、果物さえ食べられないと思っているが、これらはすべて事実ではない。しかもこのように考えている日本人は私の知る限りは皆中国に行ったことがなく、中国を理解しておらず、ただ印象だけで話をしている人である。確かにこれには国情の違いがある。例えば、日本では値段がとても高く毎回数個しか食べられないようなイチゴでも、中国では皆一皿単位で食べるなど、多くの日本人は知らない。そしてまた多少偏見の根強い人がいて、例えば中国のいくつかの沿海都市が急速に発展していても、彼らは皆東京に比べれば本当に立ち遅れていると考えている等々。これらの観点はどれも真実ではなく、でたらめでさえある。中国の大学生が日本に訪問に来ることができるのだから、逆に日本の大学生もたくさん中国に交流に訪れ、2つの隣人が互いに友好を深め、お互いを正しく認識することが、双方の関係をより良くする第一歩だと思う。

他方では、中国人の中でも多くの人々が日本を正確に認識していない。私が以前に中日友好協会での説明会に参加しに行った時、タクシー運転手は私たちが日本に行くと言くと、すぐに「小日本のどこが良いんだ。日本に行つてどうするんだ」と言った。これは明らかにまだ歴史の中に浸り、その後数十年の相手の変化を全く受け入れようとしない考え方である。このような観点は客観性に欠け、交流不足の結果、相手を正しく認識していないことの表れである。

すでに根強く固定したものを私たちは変えることはできない。しかし思想的にまだ固まっていない若者たちに自らの目で真実の世界を認識させ、独自に思考させることが中日交流の目的ではないだろうか。

大学名：国際関係学院

氏 名：柏旭

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

4. 日中間の交流

中島さんは最後にバスの車中で、「皆さん、私の名前を覚えていて下さいね」と言った。この一言が私の目頭を熱くした。今回の訪日で、私たちは真実の日本を見たが、しかしそれらが日本のすべてではない。私たちと日本の皆さんとの交流が、今後の中日交流において多少の役に立てることを願っている。

日本の人々に対する最大の印象は、他人に迷惑を掛けず、常に他人の立場に立って物事を見るということだ。例えばほとんどのトイレに障がい者専用の個室があり、また子供のために小さな腰掛けが準備され、子供が洗面台で手を洗うことができる。日本人は他人に対してとても親切で、毎朝、私たちのバスの運転手さんは車の外で私たちを出迎え、一人一人に丁寧にお辞儀しながら朝の挨拶をする。そしてどの企業でも、見学を終えてバスでその場を離れる時、見送りの人たちは見えなくなるまで私たちに向かって心を込めて手を振る。こうした行為は単に礼儀であるだけでなく、更には彼らの生活の中に内在化した本質的なものである。

今回は日本企業が出資し、私たち6校の学生が日本を訪問し日本の企業を見学する活動であり、両国の人々の相互理解に重要な役割を果たしたと言える。政治的には摩擦が絶えないが、それでも両国民はとても友好的だ。この活動を通じて私たちは日本を理解したが、より重要なのは日本の人々に中国を、そして中国の現在の大学生の様子

を理解してもらったことだ。大使館での見学時に参事官が言っていたように、中日両国は必ず友好的でなければならず、共にアジアそして全世界の平和と発展を促進していかなければならないのである。

大学名：国際関係学院

氏 名：黄馨蔚

テーマ： 4. 日中間の交流

今回の日本訪問では真実の日本を体感し、非常に多くのものを学ぶことができた。自分で体験してこそ、自分独自の考えや感想が得られるのである。この12日間で私はガイドや運転手さんから企業の従業員まで、そして大学生から早稲田大学の教授まで多くの日本の友人と触れ合ったが、私は彼らの中で中国の実情について理解している人が実はあまり多くないことを強く感じた。実際には、私たちと同年代の中国の若者にとっては、インターネットの発達により、相当数の若者が皆多かれ少なかれ日本社会や日本文化について興味を持ち、比較的客観的に理解しているが、逆に中国の実情は外国の人にはそれほど幅広く理解されていない。今回交流した日本の友人たちの多くが、私たちとおしゃべりした後に、「ああ、中国って実はそうなんだ」と言う。ここから私を感じたのは、今回私たちが日本に来て、日本から成熟した先進的な理念を学ぶと同時に、私たちも中国の実情を日本に紹介する責任があり、双方が互いに交流を深めて誤解を取り除いてこそ、確固とした友好と協力関係が確立できるということである。

このような交流は1回だけで見ればとても小さいかも知れないが、しかしこれを契機に、中国人と日本人が出会い、知り合い、友達になり、相互に理解し合い、多くの素晴らしい思い出を共有することで、皆の心の中に一粒の種が残される。そして私たち一人ひとりが他の人と交流することで、さらにその種を身の回りの多くの人の心に撒くことができる。そしてこうした交流が続くことによって、いつの日か大きな成果を出すことができると思う。

また、日本の大学生たちも私たちのように中国に来て、中国を体感できる機会がある事を心から願っている。今回の旅で私は民間交流の重要性を実感し、また今後中日友好交流に関連する職業に就く決心を固めた。

大学名：国際関係学院

氏 名：陶浩博

テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ

5. アニメなどのソフトパワー

日本の教育には「他人に迷惑をかけない」という思想があり、日本人は幼少時から一種の自律性を持っていることがわかる。また日本の社会と企業は、全員ができるだけ同一の歩調をとるという協調性を重視する。今回の企業訪問の中で、私は皆が同じ身なり、同じやり方と口ぶりである事に気付いた。私は日本の小学校、中学校ではいじめの現象が非常に深刻なことを知っているが、高度な文明社会では秩序は正に一つの戒尺であり、この社会を高度に安定させると同時に、人の精神に巨大な圧力と相違性への抹殺を引き起こしている。同時に日本人のあいまいな性格が円滑に矛盾を処理する時、また誠意を示す機会も取り除かれる。様々な性格がこの世界で一、二を争う安定した国と世界で一、二を争う自殺率を生み出した。そして中国社会にあつては、人々は比較的集団意識に欠け、公共の事が私物化されやすく、公共の秩序と利益が損なわれている。

しかし文化面では、日本の流行文化は非常に強力で、特に日本のアニメ・漫画は年齢の制限を打ち破り、構想の上でも極めて高度なレベルに発展した。産業の発達には必ず原因がある。私は日本のブックオフに行ったが、書店と

してそこで販売されている書籍は様々なものが含まれ、テーマ、方向性もそれぞれに大きな差がある。書店は深夜11時まで営業し、しかも来客は多く、日本人が書籍や知識と文化に対して極めて強い興味を持っていることがわかる。しかも地下鉄の中で本を持ち無心に読んでいる人の数も少なくない。こうしたことから本や漫画への極めて大きなニーズが、自然に文化産業の発展を促進していると考えられる。同時に日本政府の著作権に対する保護、文化産業に対する支援も文化が発展する要素の一つである。振り返って中国を見ると、多くの書店は赤字で倒産し、海賊版が横行し出版業の落日を招き、同様に音楽や映像の面でも、海賊版が溢れ、剽窃現象が業界を衰えさせている(映画産業の形勢は比較的良いかも知れない)。従って流行文化の面では全体的に混乱状態で、生命力については言うまでもない。同時に中国の伝統文化も、本当の意味では海外に紹介されていない。結論として、私は中国ではソフトパワーの育成は市場秩序の整備、業界環境の改善から始めるべきで、構造の整備こそが根本だと考える。

大学名：国際関係学院

氏 名：楊蒨

テーマ：4. 日中間の交流

今回の交流の経験から分かったのは、やはり中日間にあれこれの原因があるために、双方間の交流が不足しているという事だ。特に民間交流の面では、双方のお互いの国に対する理解はやはりまだまだ浅いと感じる。

ホームステイでホストファミリーのおばあさんと雑談していた時、彼女の理解している中日関係はやはり戦争にまつわるものだった。戦争という歴史的問題は、確かに中日間ではこれまで越え難い障害になっている。私たちは一衣帯水の二つの国なのに、双方の関係を強化せず、逆に常に歴史問題に拘っていれば、中日両国の国民を永遠に「戦争」というこの固定した概念の中に留めてしまうだけだ。しかし私が出会った中日両国の多くの人々はやはり交流を渴望している。例えば私たちは日本の先進技術を学びたいと願っており、日本の企業も私たちのこの交流訪問団と一緒に支援し、そして中日両国間の若者の交流を絶えず支援している。問題を解決しようとすれば、まず問題に向き合い、そして大同につき小異を残してこそ、問題解決の方法を見つけることができる。もちろん私たちが問題解決に苦しむ必要はなく、両国政府間が交流を絶えず深め、そして両国の民間交流を絶えず深めるべきで、このような交流があれば両国は更にお互いに不可欠で重要なパートナーになるだろう。

「精力も誠意もなければ、人を感動させることはできない」、今回の日本訪問で私は主催者側の誠意を深く感じ、また日本をいっそう理解し、中日間の「相違」を理解した。私は、私たち若い世代こそが絶えず中日両国間の交流を推進する必要と義務があると思う。

大学名：国際関係学院

氏 名：呉珂

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

飛行機に乗るとすぐに日本人の礼儀正しさを感じた。客室乗務員は皆微笑みながら私たちに挨拶し、しかもその語気はとても優しく、機内サービスも至れり尽くせりであった。その後、企業を訪問した時には、すべての席上に飲用水が準備され、また私たちへのプレゼントもあり、しかも企業説明の時間が少し長引く場合は、間に休憩時間を入れてくれた。そしてお別れの時には、ずっと私たちに手を振って別れを告げる。そして時には私たちの接待担当でない社員たちも立ち上がって、私たちにお辞儀し挨拶をする。

またホテルでは、朝の外出時に会った従業員たちは皆私たちに「お早うございます」と言い、レストランで食事をする時には、いつも私たちを席に案内してくれる。実は最も不思議に感じたのは日本のバスの運転手だ。私たちのバスの運転手は毎回私たちの荷物をすべて並べ終わると車への積み降ろしをしてくれるのだが、これは中国ではとても不思議な事で、しかも乗車時には運転手もドアの脇に立って私たちに朝の挨拶をしてくれるなど、私はこれにとっても感動した。

ショッピングの時は更に言うまでもなく、買った品物をすべてしっかりと包装し、それから私たちにお礼を言うしてくれる。洋服の場合はきちんと畳んで袋の中に入れてくれる。そのため私は日本人が礼儀の面では「礼儀の国」の中国よりもよく実践していると思う。ホームステイの時、私が辛い物が好きで日本の淡泊な食物があまり口に合わなかったが、朝食の時にホストファミリーの奥さんは私に、もし好きでなかったら残しても構わないと言ってくれた。以前に日本では食事を残すことは失礼にあたると聞いていたので、私は全部食べるように努力していたのだが、奥さんはずっと私に、もし口に合わなければ食べずに残しても大丈夫と言ってくれ、彼らがとても私に配慮してくれていることを感じた。

日本では本当に日本人の礼儀正しさを感じることができた。

大学名：国際関係学院

氏 名：王海玲

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

日本語を学んでいる私は、これまでは書籍を通して日本を理解し、日本人は特にマナーと他人への配慮を重んじることを知っていた。日本人は常に他人に対しては礼儀正しく、しかし同時にまた他人と一定の距離感をおき、他人に不快な思いをさせないように配慮している。初めのころは日本の概況の一つとして覚えていただけだったが、この小さな事柄について、私は今回の12日間の旅で思いをより深くした。

日本人のこうしたマナーは、小さなものでは生活の中の習慣から、大きなものでは企業や社会の中での行動様式まで様々な面に現れている。例えば日本では人々が食事で箸を使用する時は常に箸を上下に割り、自分の行為が他人に影響を及ぼさないよう配慮している。これは中国人が箸を左右に割るのとは違う。また企業見学の際、従業員たちはいつも別れの時にひっきりなしに私たちに向って手を振って別れを告げる。私たちもまた彼らのこうした心を込めた行為から、「ガラス拭き」という独特の別れの気持ちを告げる方法を学んだ。これらの点が私に伝えたものはいずれも真実の日本、マナーを重んじる日本、他人の気持ちに配慮する日本である。

その国の民族的特性を理解する場合、私たちに必要なのは書籍のようなマクロ的な視点からの観察と理解だけではなく、それ以上に深く日本の社会と日本人の生活の中で体感し、自らの本当の認識と考えを導き出す必要がある。

大学名：北京第二外国語大学

氏 名：鄭子茂

テーマ：4. 日中間の交流

5. アニメなどのソフトパワー

高台寺で座禅と茶道を体験した時、浄因大師は「これらはすべて中国から日本に伝わったもので、日本はこれらを保存し伝承して来たのである」とお話をされた。私はこの言葉を聞いて、とても胸が痛くなる思いがした。文化は国の根本であり、それが浸透してこそ文化は発展することができる。私たちの経済は急速に発展し、国際的地位も日増しに

上昇しているが、私たちの文化は次第に消え去ろうとしている。逆に隣国の日本では、私たちの当時の文化が継承され更に発展しているのだ。

日本人はとても聡明で、世界に自らの自然風景と伝統文化を紹介することに非常に長けている。小説では、川端康成の『古都』、『雪国』、『伊豆の踊子』にどれほどの人々が日本に引き付けられ、日本の美しい景色の鑑賞に訪れただろう。テレビドラマでは、『東京ラブストーリー』、『ロングバケーション』でどれほど多くの人々が日本の都市の華やかさを見ただろう。アニメーションでは、『名探偵コナン』、『一休さん』、『ドラえもん』が多くの子供たちの心の中に一粒の種を植え、その後彼らが日本に赴き日本を学ぶよう引き付けている。わが国は国家レベルでは日本に肉薄し、オリンピックと万博の開催に成功し、多くの外国人観光客を中国に招き、彼らに本当の中国はいかに優秀かを理解してもらうことができた。だがそれだけでは駄目で、上述のように、私たちは多くの小さな分野を利用できておらず、私たちの優れた文化を発信できていない。世界に自らを十分理解してもらってこそ、自らの良いイメージを確立することができるのである。これが日本の文化やソフトパワーの発展過程から私たちが学ぶべき点である。

今回自ら日本を訪れ、かつて書籍やテレビ、そして授業の中で理解していた日本を自分の感覚で体験し、本当に「百聞は一見にしかず」と思った。そして私は改めて中日の民間交流はまだまだ少ないと感じた。歴史や政策などの多くの要素から両国間の民間交流が不足し、現在では観光や留学などに限られている。中日間でも他国のようにワーキングホリデーを導入し、両国の青年が学習とアルバイトをしながら、相手の優れた文化を体験できるように願っている。同様にまたこのような大学生訪問団を増やし、双方の若い世代が十分に相手を理解できれば両国の未来は明るい。しかしその道は平坦ではなく、各世代の努力があってこそ両国の恒久的平和と友好が実現できるのである。

大学名：北京第二外国語大学

氏 名：楊雨辰

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

日本人の礼儀については、おそらく誰でもいくつかの例を挙げることができるほど日本人の他人に対する配慮はとて行き届いている。今回私はこの点について強く印象に残っている。私たちは今回日本で多くの「日本式マナー」を見た。例えば日本人は道を譲ってもらう場合、常に前の人に対して小さな声で「すみません」と言い、前の人もそれに対し「すみません」と言い返し、体を横にしてその人を通す。ここで日本人のこの一連の行動について分析してみる。まず、道を譲ってほしい側の人から見れば、自分の行為は他人に迷惑をかけている。次に、道を譲る側の人から見れば、自分も他人の道を遮っており、後ろの人に迷惑をかけているので、それについてお詫びをするのである。以上の分析から、日本人には普遍的にマナーと他人に配慮する要素が存在し、日本人にとっての基本的マナーは他人に迷惑をかけないということであり、この点にも日本人の他人に対する尊重が現れている。こうした例は日本ではとても多いため、ここではこれ以上の紹介は控えたいと思う。それでは日本人のこうしたマナーと思考方式はどのように形成されたのだろうか。観察と訪問を通じて、私はこのようなマナーがすでに日本文化の中に根付いていることがわかった。茶道の例では、茶道の礼儀作法の中には茶器の模様を客に向けることで尊敬を示し、相対する客は茶を味わう際に茶碗を回し模様を主人の側に向けることにより、茶をたてた人に対する尊敬を示すという作法がある。

このような文化に根差した行為と思考方式が知らず知らずのうちに日本人を感化している。これが日本の国民性の体现であり、日本の古代文化の中に包含された貴重な財産なのだ。

日本だけではなく、私たち中国にもこのような文化に根差したマナーがある。例えば、長幼序あり、師を尊び道を重んじる等々で、私たちは絶えずその中に包含された教育的価値を見つけ、自らのマナーと考え方を形成しなければならない。

大学名：北京第二外国語大学

氏 名：王禹童

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

4. 日中間の交流

今回の訪日を通じて、私にとって印象深かった2つの点は日本人の「他人に面倒をかけない」という考え方と、中日の民間友好交流がとても密接だということだ。はじめは日本人の他人との距離感については、彼らは自分のプライバシーを守るため、至る所に門を設けているようだとい方的に考えていたが、今回私は、もしかすると彼らはただ他人に迷惑を掛けたくないだけなのかも知れないと思った。

日本語には「お世話になりました」という言葉があるが、実は多くの場合、他人に迷惑をかけたとは言えないのだが、それでも感謝の意思を示すということである。日本人の礼儀作法は数多く、例えば茶道では、客への尊敬を示すため茶碗の模様は最初自分に向けられるが、自分が茶を味わう際は模様を主人に向ける。またホームステイの時、ホストファミリーのお父さんとお母さんは何かをする前、あるいは食事で料理を注文する前に必ず私の意見を尋ね、私の好みを聞き、それからメニューを決める。犬の散歩に出かける時も、霧吹きとゴミ袋を持って、愛犬が用を足した後はすぐにきちんと掃除する。日本人は皆自分のすべき事をしっかりと行う。こうした厳格な自己管理があるからこそ、調和の取れた日本があるのだ。

日本の大学生との2回の交流で、私は中日の青年の互いへの興味や友好的態度、そして心から交流を願う気持ちを感じた。グループ討論の中では、おそらく中国側の学生たちが少し緊張していることを考慮し、日本の学生はいつも積極的に「友好の手」を差し出し、中国の学生たちも次第に打ち解け、共に討議し方法を考えるなど、その過程はとても楽しく、双方はいずれも各意見には真剣に耳を傾け、そして様々な意見を発表した。その他に、三井物産の室長との交流時も、また同じ印象を受けた。室長は私たちが大学生だからといって私たちの質問に対しおざなりな対応はせず、逆に率直な意見を述べ絶えず私たちの感想を尋ねるなど、日本人の高い素養を体現していた。その他には外出の時、私たちが中国人だと知った日本人は皆微笑みを返してくれた。私は中日間の民間交流は途絶えておらず、両国間には必ずより明るい未来があると信じている。

大学名：北京第二外国語大学

氏 名：席涵沛

テーマ：6. 今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回の訪日では、私たちが宿泊したホテルニューオータニを含め全部で10社の企業と工場を見学したが、これらの企業や工場のうち6割以上がいずれも環境保護技術と資源の有効利用に関わりがあった。そして残りの企業は三井物産や三井住友銀行など環境に危害を与える商品は生産しない企業であるが、これらの企業も社会貢献の面で環境の緑化に取り組んでいる。

彼らの環境保護上の技術にも驚きを禁じ得ず、なんと発生する廃棄物の100%リサイクルが可能であり、また風力、太陽エネルギー、火力発電の利用とともにゴミ処理工場のゴミ処理技術はほぼ完璧に近く、これらは現在の中国が学び普及させなければならないものである。

現在中国では水や大気などの汚染が日増しに深刻になり、更には人体に有害なスモッグまで発生している。これらの中国の発展に影響を及ぼす環境問題をいかに解決するか、中国は正に日本のこれらの技術を必要としている。また日本のトイレで一般的に使用されている水に溶けるトイレットペーパーのような技術も、中国の将来の環境保護及び

環境美化に不可欠である。こうした技術そのものについては詳しくは知らないが、しかしそれがもたらすトイレの清潔さや環境への保護は軽視できない。

中国の汚染処理には日本の技術が必要である。経済の発展のために人と自然の調和を実現してこそ、中国の未来は明るくなるのである。

大学名：北京第二外国語大学

氏 名：許舒園

テーマ：5. アニメなどのソフトパワー

アジアで最も発達した国である日本は、人々が羨みそして感心する点がたくさんある。私が日本に興味を持った引き金は日本の支柱産業の一つであるアニメ・漫画産業である。

多くの友人と知り合った後、私は私と同じような考え方を持っている人が少なくないことを知った。そして私が日頃よく見る欧米のウェブサイトでも日本の漫画産業の人気の非常に高い。そのため、日本の漫画のスタイルはすでに世界的に高く評価され、その地位は安泰であると言える。

アニメや漫画、ドラマなどのソフトパワーの発展においては、日本人はそれを極限にまで発展させている。今回のホームステイ期間中、私は自分のホストファミリーにアニメや漫画関連商品が集中している有名な秋葉原に連れて行って欲しいとお願いした。そこは完全にアニメファンの天国であった。アニメや漫画そのもの以外にも、その関連商品は生活用品の隅々にまで拡大している。ペーパーホルダー、しおり、キーホルダー、ポスター、抱き枕、シール、洋服から食品に至るまで、何でも揃っている。秋葉原のアニメイトは7階建てで、各階ごとに異なるアニメや漫画関連商品が販売されている。確かに多少大げさかも知れないが、それでも自らのソフトパワーをこれほどまで発展させ、ハードパワーにまで転化させている日本には敬服せざるを得ない。

12日間の訪問を通して、日本人は物事を極限にまで発展させることを好むという印象が、私の脳裏に深く刻まれた。どんな事柄であろうと、自分にできることであれば、必ず完璧と言えるまで発展させる。それぞれの国が強大である理由は異なるかも知れないが、もし日本が強大な理由について言うとするば、私はこのような民族的特性が理由だと思う。